

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2015

長編部門『うつろう』 久保裕章監督インタビュー

——まず、今回の作品は Doctor Merrick Productions の制作作品とのこと。このプロダクションは資料によると、“メロドラマの復活を掲げる”とあるのですが？

“復活”とかそんな仰々しいものではないんですけど（苦笑）、僕自身がメロドラマ好きで有志とともに2013年に結成しました。活動としては、今回のように自分たちでメロドラマの新作を撮ったり、メロドラマの傑作ながらあまり知られていない埋もれた旧作を上映するイベント「Kiss My Stella Dallas」を開いています。

——結成するに至る、いきさつを少し教えていただければと思います。

確か2012年、木下恵介監督の特集上映があつて『今年の恋』を見に行っただけです。すると観客が僕と友人のたった2人（笑）。例えば、カール・ドライヤー監督の作品を昔、名画座で一人きりで見た時は、ある意味“おお、孤高の映画作家”という感じで納得したのですが、お正月映画として封切られた『今年の恋』を二人で見るのは、なんかしっくり来ない。僕たちは基本“ヤバい映画”を探して映画館に足を運ぶ訳ですが、“名画座系の懐かしの作品”というカテゴリーが邪魔をして、その“ヤバさ”が伝わらない作品がたくさんある。それに日本で“ヤバい古典”と言えば、小津、溝口、成瀬…、みたいな、出てくる名前もそれを語る言葉も“ああ、またいつものアレね”という風潮にもうんざりしていました。そんな中でいわゆる古典メロドラマ作家の中に、既存の映画批評の言葉では、どうにも語りにくい“ヤバさ”を持った人たちがおり、その“ヤバさ”に何らかの可能性を感じていた。そんなことを日々、友人達と語っており、いつそのこと製作や上映もしてしまう団体を創ろうとなったのが、簡単な経緯です

——久保監督の中にメロドラマの定義みたいのはあるのでしょうか？

メロドラマというと、ありえないようなドラマチックなことが起きたり、ただならぬ愛が描かれたり、大げさな音楽が流れたりといったイメージがあると思うんですけど、僕にとっては違って。たとえば『君の名は』などで知られる大庭秀雄監督の作品など見るとそうなんですけど、“映画としての純度が低い”。つまり映像に映らないとされる文学的な要素などにも平気で食い入っていくことで、見たことの無い地平を切り開く作品のことでしょうか。

——では今回の『うつろう』ですが脚本はどんなアイデアから生まれたのでしょうか？

なんとなくなんですけど僕の中に“自分が理解できない人を理解出来るように描きたい”というのがいつもテーマにあつて。そういえば日曜日の公園とかで絵を描いているある程度歳のいった女性とか相容れないなと（笑）。もちろん僕の勝手な思い込みで、実際話してみたら気が合うかもしれないんですけど。そこから始まって、年の差のある男女が恋に落ちる物語を描きたい気持ちもあつたりして、今回のストーリーが出来ていきました。

——30代独り身の絵画教師の貴子と、彼女をずっと慕い続けてくる中学三年生の悠の道ならぬ愛の物語が展開していきます。通常だともっとドラマチックに過剰な演出をほどこしたくなる題材なのですが、あえてというぐらい抑えた演出に徹しているのが印象的でした。

今はラブ・シーンがあつたら、包み隠さず裸になるのが当たり前になっていますけど、僕はそれがいとは思わない。昔のメロドラマなどは裸に限らず「隠さないと見えないものがある」ことを知っていたのだと思います。背徳的な行為をそのまま描くより、背徳的な行為を日常の延長線上のような感覚で描くとより背徳感が強まったりする。そういう創意工夫を大切にしたいと思いました。

——今回、映画祭での上映に臨むに当たって、今はどんなことを考えていますか？

大きなスクリーンで自分の作品が上映されるのはやはりうれしいです。自分の考えるメロドラマの良さが作品を通じて、観てくださった皆さんに伝わればと思っています。

——ゆうぱり国際映画祭のオフシアター・コンペティション部門にもノミネートされています。そのときの反応はどんな感じでしたか？

いろいろな声をいただいたのですが、個人的に印象に残っているのはシッチェス国際映画祭のプログラムディレクターの方からいただいた言葉で。“今生み出されるメロドラマのほとんどはメロドラマをシニカルに捉えて、パロディにしたもの。でも、君は本物のメロドラマファンだ。この作品はトゥルー・メロドラマだ”とってください、大きな自信になりました。

——最後にプロフィールをお聞きしたいのですが、この世界に入ったきっかけは？

高校生のとき、真似事ですけれど友人と映画を作っていて。親戚が飲み屋をやっていたんですけど、そこの常連客にロマンポルノの監督がいて、作ったものを見てもらったりしていたんです。そうこうして大学卒業となったとき、現場に来るか声をかけられて入ったのが始まりです。でも、早い段階で現場向きではないと気づいた（苦笑）。そのとき、知人のプロデューサーが留守番の多い制作会社の職を世話してくれて。留守番中にシナリオを書いて応募していたりしたら、なんとなく脚本の仕事が入ってきたりしました。ただ、やはり映画を作りたいなと。それで、改めて映画美学校で映画を学ぶことにしました。そこで映画を作る仲間が出来て、『うつろう』にも参加してくれています。で、現在に至る感じです。

——今後はどんなヴィジョンを描いているのでしょうか？

今回は長編第一作なので今の気持ちとしては“まずはスタートラインに立てたかな”と。先のことはわかりませんが、シナリオライターや構成作家として活動しつつ、今後も映画を作り続けたいと思っています。



『うつろう』
監督：久保裕章 出演：出演：横山真弓、大内陸、高橋綾沙、高田優輝、内田量子、佐藤貢三、金橋良樹、万田邦敏 <2014年／日本／100分>
©Doctor Merrick Productions